沖縄県護国神社社報

うむい 七号

慶祝　親王殿下御誕生

秋篠宮家には、平成十八年九月六日に悠仁親王殿下が御誕生され、同月十二日の御命名当日、「親王御誕生奉告祭」を斎行し、この御慶びを役員職員こぞってお祝い申上げ、皇室の弥栄を心より祈念申上げた。

表紙写真
［終戦六十周年記念臨時奉幣祭・第四十七回秋季例大祭］

社報「うむい」について

沖縄の言葉で「思い、願望、考え、所存」のことを「ウムィー」といい、戦争で亡くなっていった人達の思い、そして残された遺族、戦友達の思いを次の世代へと継承すべくつけられた名前。

日清戦争以後、敢然と国難に立ち向かっていった先人たちの尊い精神が、この「うむい」を通して末代まで受け継がれ、真に戦争の無い平和な世の中になるようにとの願いが込められている。

目次

新任あいさつ「護国の大神」に感謝
宮司代務者　伊藤陽夫……3
護国神社この一年……4
永代祭のご案内……7
神宮式年遷宮第一次お木曳行事に参加して
護国神社代表役員　座喜味和則……8
永代祭新規申込者御芳名……10
永代祭御供奉納者御芳名……10
新参集殿御造営奉賛金奉納者御芳名……11
社務日誌抄……18
御奉納一覧……19
編集後記

―新任ごあいさつ―「護国の大神」に感謝

宮司代務者　伊藤　陽夫（はるお）

ちょうど今から四年前、まだ明治神宮禰宜の時、観光でガマを案内されました。先の大戦で県民皆さんの凄惨なる犠牲死、死屍累々たる山野の模様、地獄図ながらの被災・激戦状況をつぶさに知らされました。遅まきながら、尋常ならざる衝撃を受けました。その場で私は、一年後にひかえていた定年退職のあとは、巡礼に出ようと心に決めました。沖縄の大戦の犠牲者たち皆さんの苦しみや嘆きや悲しみや恨みの阿鼻叫喚が怒濤のように押し寄せてくる感をうけました。何かにとりつかれたように、これらの御霊たちのたましいの救いが無くしては日本の国は浮かばれない、真の安寧、安泰、繁栄は望まれない、という強い思いがとどまってしまいました。

かつて竹山道雄が『ビルマの竪琴』で、水島上等兵が隊を離れ巡礼の僧侶になる物語を以て、戦争の犠牲になった御霊の供養をうったえました。戦後文学界に名を残しています。その主人公は、親しい戦友とも、なつかしい古里とも、帰還後再会出来る家族とも決別して、それら全てを犠牲にしてでもその道を選んだのでした。それほどの犠牲を伴うわけではない小生の場合ではありましたが、周囲からは随分と怪訝（けげん）な目で見られました。

六十五歳の定年退職を期にあと半生、即ち百三十歳までは沖縄で慰霊の祭祀に明け暮れる人生を送ろうとの覚悟で当県の住人になりました。幸い、忝なくも座喜味会長ほか役員皆様方、又吉前宮司、事務局長、神職、職員皆さんの歓迎をうけて昨年十一月から嘱託禰宜待遇、そして本年三月末日で勇退された又吉宮司のあと、四月一日付で宮司代務者として任用されました者でございます。

所期の目的念願が、こうした形で実現するとは思いもよらぬ事で、毎朝の「御日供祭」と「命日永代供養祭」を奉仕させて頂きながら、御霊たちの御導きを感謝申し上げ、「護国の大神」になられた御霊たちの霊界神界における更なるご昇華、ご昇進をお祈り申し上げております。

追悼、慰霊、顕彰が護国神社の本務と心得ながらも、「護国の大神」として仰ぎ、多くの参拝者の願い事も叶えて頂ける御神徳をもつ神として奉斎し、参拝者との中取り持ち役を神職一同と共に真心込めて奉仕させていただいております。昨今とみに当社が霊験あらたかな神社として評判が立っておりますことは誠に有り難いことでございます。又吉前宮司時代にも益して何卒よろしく大方のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

護国神社この一年

「終戦六十周年記念平和祈願祭並びに集い」

平成十七年九月四日、沖縄県遺族連合会主催による終戦六十周年記念平和祈願祭並びに集いが自治会館に於いて、当神社渡辺権禰宜斎主のもと厳粛・盛大に斎行された。当初本神社で斎行される予定であったが、台風襲来の為、急遽祭場を変更しての祭典となった。祭典には当社の又吉眞興宮司と宮里洋子事務局長が参列した。

「終戦六十周年記念臨時奉幣祭・第四十七回秋季例大祭」

平成十七年十月二十三日、第四十七回秋季例大祭が御遺族、崇敬者約五百人の参列のもと斎行された。今回は終戦六十周年にあたり、畏くも天皇皇后両陛下よりの幣帛料が神前に供えられ、終戦六十周年記念臨時奉幣祭として厳粛・盛大に祭典が斎行された。定刻の午後一時、大祭開始を知らせる太鼓の合図とともに祭典が始まり、斎主渡慶次馨波上宮禰宜の祝詞奏上に続き、大祭委員長座喜味和則沖縄県護国神社会長、沖縄県遺族連合会仲宗根義尚副会長がそれぞれ祭文を奏上した。

祭典には、靖國神社宮司を始め神社本庁統理、日本遺族会会長ほか全国各地から慰霊電報及び祭詞が寄せられ、御神前に大分県雲八幡宮秋永万岐権禰宜によるみたま慰めの舞が奉納された。又、MOA山月の皆さんによる献華も行われた。

尚、終戦六十周年を記念して、参列者全員に「株式会社久米島の久米仙」の御協力により特別に瓶詰めされた御神酒を撤下した。

終戦六十周年記念臨時奉幣祭 第四十七回秋季例大祭 祭文

本日、ここ沖縄県護国神社の大前におきまして全県下の御遺族及び御来賓の方々、多数の御参列のもと終戦六十周年記念臨時奉幣祭並びに第四十七回秋季例大祭が厳粛に斎行されるに当り、大祭委員長座喜味和則謹んで祭文を奉り慰霊奉安の誠を捧げます。

今、謹み顧みますれば、この神社に神鎮まります十七万八千余柱の御英霊は日清・日露戦争、特に苛烈を極めた大東亜戦争においてひたすら我が国の安泰を願い素晴らしい未来を信じ、愛する家族を案じつつ気候風土の異なる戦場あるいはこの沖縄での地上戦にて国土防衛の防壁として勇戦奮闘したのでありますが、武運つたなく戦場に散り戦禍に倒れ、尊き御身を祖国の為に捧げられたのであります。

今在りし日を偲び国難に殉じられた御英霊にあらためて追慕の念深く万感胸に迫るものがございます。月日の経つものは早いもので本年は大東亜戦争終結六十年の意義深い年を迎えました。

畏くも天皇陛下には終戦六十年の節目を迎えるにあたり御英霊の上を深くお思し召され、全国の護国神社五十二社へ幣帛料を供進遊ばされました。洵に有難く恐懼の極みに存じます。

この六十年の間、我が国は国民のたゆみない努力によって世界でも有数な先進国としてめざましい発展を遂げ、国民は平和で豊かな生活を享受しております。

我が沖縄県も経済、福祉、教育等あらゆる分野で著しい発展を遂げております。沖縄県民は戦後の苦しい経済状況大混乱の世相の中から共に助け合い励ましあって幾多の苦難を乗り越え精一杯生き抜き、現在平穏にすごさせて戴いております。またこの御社は、御遺族の心の拠所、県民の平和を祈念する場、繁栄を祈願する場として多くの御参拝を戴いており県民の御社として親しまれております。これ偏えに祖国の安泰を念じて御国の礎となられた御英霊の御加護の賜物であり深く感謝致しております。

今日の我が国の平和と繁栄は、御英霊の気高き殉国散華ののいさおしと御加護の上に築かれている事を片時も忘れてはなりません。しかしながら昨今の国情は、独立国とは言え他国からの干渉、北朝鮮による拉致の事実等御英霊の憂える方向に流されている様に思えてなりません。

〈中略〉

御英霊にゆかりの深い御遺族、戦友の方々は御高齢となり戦後生まれの国民が大多数となり、御英霊に対する関心も薄らぎ憂慮されますが、私達は戦争の悲哀、悲惨さを反省し御英霊の御勲功を子々孫々に伝え、未来永劫に亘り御霊の慰霊顕彰に励み、国際社会の一員として世界の恒久平和の確立に貢献せねばなりません。

小泉首相は、靖國神社秋季例大祭の初日にあたる十七日に就任以来五回目の参拝をなされました。「戦没者を追悼する自然な気持ちと二度と戦争を起こしてはいけないという不戦の決意で参拝した」と述べられました。首相の参拝をめぐっては、賛否両論がございますが、一国の首相として靖國神社へ参拝する事は、当然の事であり大変有り難い事でございます。御英霊もさぞかしお悦びの事と拝察致します。

例年この季節になりますと、御英霊の郷里の御遺族、戦友、関係者の方々が懐かしい御供物をたずさえて皆様の元へ御参拝なさいます。本年も全国各地から多くの御参拝が予定されております。久しぶりに御対面を心待ちにしておられる事と存じます。何卒、御英霊の皆様には、永久にこの御社に神鎮まりまして世界の恒久平和と御遺族、御来賓の方々に限りない御多幸と御繁栄を賜ります様心から御祈念申し上げ祭文と致します。

平成十七年十月二十三日

沖縄県護国神社
終戦六十周年記念臨時奉幣祭
第四十七回　秋季例大祭
大祭委員長　座喜味　和則

「大祓式」・「除夜祭」・「歳旦祭」の斎行

平成十七年十二月三十一日から平成十八年一月一日にかけ、「大祓式」・「除夜祭」・「歳旦祭」が斎行され、新しい年に向けての祈願が行なわれた。

また、御社殿前に設けられた特設スタジオから、恒例の民放ラジオの生放送が行われた。

正月三ヶ日の御社頭は本神社始まって以来最高の二二万五千人の参拝者で賑わった。

「第四十八回春季例大祭」

「祭文」で陛下の御心伝わる。

平成十八年四月二十三日、第四十八回「春季例大祭」が斎主伊藤陽夫宮司代務者のもと斎行された。秋季同様、約五百人の御遺族、崇敬者が参列し厳粛に祭祀が執り行なわれた。祭典では、裏千家淡交会沖縄支部よりお茶の奉納が行われ、また航空自衛隊那覇基地太鼓部による奉納太鼓も行われた。

尚、例年の座喜味大祭委員長の祭文のなかで、次のようなくだりがあった。

昨年は終戦六十周年という節目の年でございました。畏くも天皇陛下より全国の護国神社五十二社へ幣帛料を供進遊ばされ当神社におきましても秋の例大祭に併せて記念臨時奉幣祭を斎行致しその旨を御奉告申し上げました。

去った三月には、五十二社の宮司全員が揃って皇居へ参内し幣帛料御下賜のお礼を申し上げました。畏くも天皇陛下より**「高齢化する遺族の皆さんの心の支えになる様、これからも神社の護持に励んで下さい」**とのお言葉を賜りました。洵に有り難く恐懼の極みに存じます。

「戦没者総合慰霊祭」

平成十八年六月二十三日（慰霊の日）、戦没者総合慰霊祭が斎主伊藤陽夫宮司代務者のもと斎行された。

平成十八年八月十五日正午より、神社、英霊にこたえる会沖縄県本部共催、沖縄県遺族連合会後援による「終戦記念日みたま祭り」が斎行された。開式の辞、黙祷、国歌斉唱の後、斎主伊藤陽夫宮司代務者の祝詞奏上、英霊にこたえる会沖縄県本部太田政弘会長の祭文奏上が行われ、最後に沖縄県護国神社座喜味会長により閉式の辞が述べられた。

祭典終了後、境内に於いて直会を行い、伊藤陽夫宮司代務者の終戦記念日に因んだ講話・各団体代表者の挨拶が行われ、親睦がはかられた。

正午の時報に合わせて黙祷がささげられ、御遺族多数が列席する中、祭典が厳粛に執り行なわれた。

「終戦記念日みたま祭り」

永代祭祀のご案内

当神社では、春・秋の例大祭を始め六月二十三日の「戦没者総合慰霊祭」、八月十五日の「終戦記念日みたま祭り」等種々の祭典を御奉仕し、戦争によって散華されたみたまをお慰め申し上げております。

また、各々の戦没者の御命日には神前にて永代命日祭を斎行致しております。

この永代命日祭は、御遺族からのお申し出により斎行されるもので、当神社では、沖縄県出身の戦没軍人・軍属並びに一般住民を始め、沖縄戦にて散華された本土出身戦没者の御遺族方からの永代祭祀申込みを受け付けております。

永代祭申込み後は、御遺族へ前もって御案内申し上げ、命日に祝詞を奏上し、御祭神の慰霊安鎮と御遺族の御繁栄を祈念致します。

尚、永代祭申込み初穂料は二万円以上となっております。詳しくは、当社社務所〇九八―八五七―二七九八までお問い合わせ下さい。

神社への車輌乗り入れについて

当神社は奥武山公園内に鎮座しており、お車での参拝は公園入口ゲートを通る形となっております。現在、公園内は車輌の乗り入れや駐車が規制されておりますが、神社との協約により参拝者の車輌は乗り入れてもよい事になっています。お車での参拝の際は、警備員にその旨を告げていただき「車両入園許可証」を受け、神社にて「用務先印」を押印下さいます様お願い致します。

※ゲート開閉時間
午前八時三〇分～午後六時

《これからの予定》

- 平成十八年十月二十三日
  「第四十八回秋季例大祭」
- 平成十八年十一月十五日
  「七五三祭」
  （十一月中受け付け）
- 平成十八年十一月二十三日
  「新嘗祭」
- 平成十八年十二月三十一日
  「大祓式」・「除夜祭」
- 平成十九年一月一日
  「歳旦祭」
- 平成十九年一月三日
  「元始祭」
- 平成十九年四月二十三日
  「第四十九回春季例大祭」
- 平成十九年六月二十三日
  「戦没者総合慰霊祭」
- 平成十九年八月十五日
  「終戦記念日みたま祭り」

神宮式年遷宮第一次お木曳行事に参加して

沖縄護国神社代表役員
座喜味　和則

お伊勢さんと呼ばれる伊勢神宮は皇大神宮と豊受大神宮を中心とする日本で最も貴い神社と言われています。皇大神宮は「内宮」ともよばれ、皇室の御祖神であり国民の大御親神でもあられる天照大御神をおまつりしています。豊受大神宮は「外宮」ともよばれ、主食であるお米をはじめた衣食住のめぐみを与えてくださる豊受大御神をおまつりしています。

皇居でおまつりしていた天照大御神を約二千年前に伊勢の地におまつりして以来、現在に至るまで皇室の弥栄、国家の安泰、国民の平和を祈る祭が続けられてきました。

内宮と外宮で最も大きな祭典が二十年に一度の式年遷宮祭であります。遷宮とは新しいお宮を造って大御神をお遷り願うことで、式年とは定められた年（この場合二十年ごと）を意味します。

二十年に一度造り替えられる神殿の建築様式は、唯一神明造と呼ばれ、柱は円柱の掘立式で、屋根は切妻造の平入りで萱葺。棟の両端を棟持柱で支える、弥生時代にまで遡る高床式穀倉の伝統的様式の原型を今に伝えています。

前回の第六十一回神宮式遷宮は平成五年に行われました。

第六十二回神宮式年遷宮は平成十七年五月の山口祭に始まり八ヶ年に亘って三十に及ぶ祭典、行事を経て平成二十五年に遷御の儀を迎えるのであります。造営の御用材は長野県と岐阜県の「御柚山」の檜が伐り出されます。凡そ一万五千本と言われています。この御用材を伊勢の神領民が外宮、内宮にお納めする奉仕が「お木曳」行事で無形の民俗文化財の指定を受けています。お木曳行事は第一次と第二次の二回行われます。

第一次お木曳行事が去る四月二十一日に始まり毎週土、日に行われ六月四日まで通算十五日間行われました。

沖縄県神社庁は第一次お木曳行事に参加するため三十六名（団長沖縄県神社庁副庁長新垣義夫普天満宮宮司）が六月三日～五日までの二泊三日の日程で参加しました。私は沖縄県護国神社を代表して参加させてもらいました。旅行二日目の六月四日（日）全員白のハッピ、白ズボン、

白鉢巻、白ぐつの法被姿で午前七時半ホテルをバスで出発、午前八時伊勢市宮町で下車すると、直径約六十センチ、長さ約十メートルの檜の大木をしっかりと結び置かれた第一番車、第二番車、第三番車が待っていた。私達沖縄代表は第二番車に割当てられた。第一番車が出発した後、いよいよ我々の番となる。第二番車は十六団体一、〇九一人であった。お木曳車の前方左右に約二〇〇メートルの真新しい太い白綱が取りつけられており、その綱を両方に分かれて手に持つ。沖縄の位置は車のすぐ手前。主催者の特別なお取計らいで出発式に新垣義夫団長が挨拶を述べる機会が与えられた。午前九時出発、エイヤーエイヤーの掛声をかけて全員の士気を高めながらお車を曳く。一、五〇〇メートルの道程を五十分間かけて安全無事に外宮まで御奉曳した。道路の交叉点には伊勢市の青年男女や自衛隊の方々が交通整理に当り市民総出の勇壮な祭典でした。其の感動は何とも言えませんでした。外宮到着後全員で外宮へ昇殿参拝してお木曳行事を無事終えた。

午前十一時バスで外宮出発、内宮に向った。内宮は松の大木が空を覆う広大な神域で参拝者は殆ど白装束の方々ばかり。昇殿参拝は申し込み順のため相当の時間待ちをして昇殿参拝した。参拝を終えたのが午後一時過であった。今日の有意義な行事に参加した事は私の終生忘れ得ない一日となることでしょう。

通算十五日間おこなわれた第一次お木曳には旧神領民四万五千八百人、一日神領民三万四千六百人が奉仕され、沿道に詰めかけた人の数は総計十四万八千八百人と発表されています。

第六十二回神宮式遷宮用材奉曳本部長、森下隆生伊勢市長は「混迷を極める現代社会において、我々が喚起しなければならないのは、真に素であり、純粋である生成りの精神ではないかと存じます。千三百年余の永きに渡り二十年毎に新しい社殿を造り、御装束神宝を古式のまま調製されるお祭りは、世界の類を見ない我が国独自のものであり、古代から受け継がれてきた日本の心そのものであります。遷宮とはまさに魂の継承なのであります」と挨拶されて居られます。

第二次お木曳行事は平成十九年に行われてる事になっています。多数の方がご参加される事を切望する次第です。

本旅行にご高配下さった沖縄県神社庁及び行き先でお世話賜った関係者に厚く謝意を表して私の感想記と致します。

永代祭新規申込者御芳名

（平成十七年九月一日～平成十八年八月三十一日）

・三重県桑名市　伊藤　三郎　様
・石川県金沢市　加藤　トモ　様
・北海道美貝市　障子　アキエ　様
・和歌山県有田郡　西本　とよ子　様
・岡山県岡山市　矢田　和親　様
・北海道札幌市　古川　きみ　様
・石川県金沢市　渡辺　アヤ　様
・北海道札幌市　天野　喜美　様

永代祭御供奉納者御芳名（重複掲載有り）

（平成十七年九月一日～平成十八年八月三十一日）

・愛知県小牧市　橋本　かや　様
・岩手県盛岡市　瀬川　淳　様
・沖縄県那覇市　仲村　致慶　様
・北海道静内郡　島瀬　キクエ　様
・福井県喜多方市　田中　昭二　様
・愛知県刈谷市　丹村　要二　様
・三重県四日市市　森　安吉　様
・沖縄県那覇市　高江洲　愛子　様
・佐賀県杵島郡　千綿　ミエ　様
・佐賀県杵島郡　北野　オクニ　様
・岩手県岩泉町　佐々木フユ　様
・北海道札幌市　浅田　興屋　様
・岐阜県下呂市　熊崎　つや　様
・岐阜県岐阜市　岡田　きよ子　様
・石川県金沢市　加藤　トモ　様
・北海道根室市　松原　マツ　様
・滋賀県守山市　小島　幸雄　様
・三重県志摩市　杉木　茂樹　様
・沖縄県那覇市　高江洲　愛子　様
・東京都武蔵山市　渡辺　三郎　様
・北海道札幌市　絹川　美智子　様
・北海道余市町　木村　シズ子　様
・沖縄県那覇市　与儀　シゲ　様
・北海道足寄郡　大竹口　重幸　様
・沖縄県那覇市　屋良　朝正　様
・神奈川県横浜市　久保井　淑子　様
・愛知県一宮市　原　江つ　様
・三重県志摩市　杉木　茂樹　様
・愛知県犬山市　吉野　幸雄　様
・北海道札幌市　鳴海　美栄子　様
・北海道古宇郡　澤田　政枝　様
・北海道札幌市　櫻井　朋子　様
・北海道千歳市　工藤　イク　様
・北海道美貝市　馬面　美枝　様
・三重県津市　吉川　つや　様
・山口県宇部市　上田　喬　様
・石川県金沢市　渡辺　アヤ　様
・北海道美貝市　障子　アキエ　様
・石川県金沢市　若松　テツ　様
・岐阜県岐阜市　江崎　明美　様
・岩手県盛岡市　瀬川　淳　様
・千葉県千葉市　布施　茂　様
・北海道札幌市　長野　洋子　様
・北海道札幌市　鶴原　正規　様
・北海道札幌市　土橋　慶子　様
・北海道札幌市　古川　きみ　様
・北海道函館市　伊藤　和子　様
・岩手県花巻市　瀬川　タエ　様
・福岡県福岡市　大橋　温子　様
・神奈川県横浜市　高津　菊枝　様
・沖縄県石垣市　瀬名波　長宏　様
・北海道旭川市　三村　一徳　様
・大分県玖珠郡　中島　美千代　様
・山梨県甲府市　佐藤　ひでの　様
・福岡県大牟田市　小柳　昌敏　様
・愛知県豊橋市　杉浦　文子　様
・熊本県山鹿市　岡部　ハツ子　様
・大阪府堺市　恵　親也　様
・神奈川県横浜市　松本　敬子　様
・東京都八王子市　石上　順子　様
・沖縄県那覇市　仲村　致慶　様
・徳島県阿南市　幸田　かね　様
・北海道苫前郡　土田　千代　様
・北海道札幌市　北村　孝子　様
・滋賀県栗太郡　堀池　四郎　様
・佐賀県三養基郡　立石　博義　様
・兵庫県淡路市　荒川　文子　様
・北海道斜里郡　朝倉　三省　様

・愛知県豊橋市　小野　よし子　様
・石川県小松市　南出　春子　様
・茨城県取手市　大塚　幸男　様
・宮城県黒川郡　菅原　義則　様
・神奈川県横浜市　高津　菊枝　様
・高知県南国市　西原　降稜　様
・北海道函館市　佐藤　武司郎　様
・北海道上川郡　阿部　辰巳　様
・東京都中野区　佐々木禎助　様
・神奈川県横浜市　山本　太一郎　様
・北海道上磯郡　田島　義史　様
・東京都葛飾区　小島　亀太郎　様
・岡山県津山市　石川　好蔵　様
・熊本県熊本市　松尾　雪子　様
・東京都荒川区　川俣　雄弘　様
・北海道札幌市　鳴海　美栄子　様
・東京都江戸川区　岡田　昌久　様
・千葉県市川市　松永　修巳　様
・神奈川県横浜市　松永　利喜子　様
・愛知県豊橋市　黒木　正敏　様
・愛知県名古屋市　牧　清　様
・三重県伊勢市　近藤　義文　様
・北海道札幌市　外山　とめ　様
・愛知県一宮市　植松　香　様
・北海道江別市　後藤　修士　様
・愛知県岡崎市　田村　文雄　様
・愛知県豊橋市　内藤　はる子　様
・徳島県徳島市　田中　静子　様
・北海道網走郡　成田　静子　様
・北海道根室市　松原　マツ　様
・北海道札幌市　加藤　勤　様
・愛知県海部郡　気田　一郎　様
・岐阜県中津川市　岡山　孝平　様
・北海道陣川町　川口　順平　様
・沖縄県那覇市　与那嶺　文子　様
・大阪府大阪市　三木　ツネ子　様
・北海道札幌市　沼田　栄二　様
・北海道北見市　十良沢　義治　様
・福岡県柳川市　中川　小夜子　様
・三重県伊勢市　村井　重男　様
・広島県安芸郡　村井よし子　様
・滋賀県蒲生郡　高橋　正明　様
・愛知県津島市　清水　勝剛　様
・京都府八幡市　加藤　恵一　様
・沖縄県浦添市　斉藤　金蔵　様
・北海道札幌市　濱松　昭　様
・滋賀県甲賀郡　川上ふさゑ　様
・沖縄県那覇市　宿谷　長次　様
・沖縄県中城市　森田　孝秋　様
　宮平　オトメ　様

新参集殿御造営奉賛金奉納者御芳名

（平成十七年九月一日から平成十八年八月末日までの御奉納者）

二万　沖縄市美里　喜屋武　澄　様
二万　帯広市幸福町　梶　光雄　様
二万　札幌市西区　浅田　興屋　様（累計五万）
一万　岡山県総社市　中村　和永　様
一万　広島県福山市　渡辺　勝之　様
一万　札幌市厚別区　鶴原　正規　様（累計六万）
一万　札幌市厚別区　井上　十重子　様（累計五万）
一万　千葉県東金市　高山　友二　様（累計六万）
一万　那覇市高良　中澤　恵子　様（累計二万）
一万　福井県福井市　野阪　重信　様（累計三十一万）

社務日誌抄

（平成十七年九月～平成十八年八月）

九月

・四　日　沖縄県遺族連合会主催　終戦六十周年記念平和祈願祭奉仕
・一五日　敬老祭
・二三日　秋分祭
・二三日　修養団捧誠会正式参拝及び神石祭奉仕

十月

・一　日　京都霊山護国神社自由参拝
・二　日　平和の像整備除幕式奉仕
・八　日　那覇まつり市民フェスティバル成功祈願祭
・一七日　神嘗祭
・二一日　沖縄の産業まつり成功祈願祭
・二二日　群馬県遺族の会正式参拝
・二二日　宵宮祭
・二三日　終戦六十周年記念臨時奉幣祭並び第四十七回秋季例大祭
・二四日　福島県遺族会正式参拝
・二四日　兵庫県遺族会自由参拝
・二五日　東京都遺族連合会正式参拝
・二八日　福岡県護国神社正式参拝

十一月

・三　日　明治祭
・四　日　鳥取県遺族会正式参拝
・四　日　因伯の塔慰霊祭奉仕
・五　日　山口県遺族連盟正式参拝
・六　日　栃木県遺族連合会正式参拝
・七　日　徳島県遺族会正式参拝
・八　日　香川県遺族連合会正式参拝
・九　日　山梨県遺族会自由参拝
・一〇日　福岡県護国神社正式参拝
・一〇日　富山県南方戦没者沖縄慰霊塔奉賛会正式参拝
・一〇日　長崎県戦没者慰霊奉賛会正式参拝
・一〇日　熊本県遺族連合会正式参拝
・一〇日　高知県遺族会正式参拝
・一〇日　山梨県遺族会南都留支部正式参拝
・一一日　青森県遺族連合会正式参拝
・一一日　静霊奉賛会正式参拝
・一三日　三重県遺族会正式参拝
・一三日　北海道連合遺族会正式参拝
・一四日　大分県遺族連合会正式参拝
・一四日　新潟の塔奉賛会正式参拝
・一五日　奈良遺族会正式参拝
・一五日　佐賀県遺族会正式参拝
・一九日　茨城県遺族連合会正式参拝
・二二日　岩手県遺族連合会正式参
・二三日　新嘗祭
・二四日　埼玉県遺族会正式参拝
・二四日　岐阜県遺族会正式参拝
・二五日　千葉県遺族会正式参拝
・二五日　神奈川県遺族会正式参拝
・二九日　岡山県遺族連盟正式参拝
・三〇日　和歌山県遺族連合会正式参拝

十二月

・五　日　秋田県女子神職会正式参拝
・二三日　天長祭
・三一日　大祓式・除夜祭

一月

・一　日　歳旦祭
・三　日　元始祭
・九　日　成人祭
・二一日　航空自衛隊那覇基地太鼓部新年奉納太鼓

二月

・三　日　節分祭
・七　日　石川県神道青年会正式参拝
・八　日　和歌山県伊都郡遺族連合会正式参拝
・九　日　日本青年遺骨収集団（ＪＹＭＡ）正式参拝
・一一日　紀元祭
・一四日　ＪＹＭＡ記念植樹
・一五日　大分県神社庁正式参拝
・一七日　祈年祭
・一八日　修養団捧誠会正式参拝
・一九日　修養団シルバーボランティア慰霊祭奉仕
・二〇日　富山県護国神社正式参拝
・二一日　札幌市連合遺族会正式参拝
・二三日　山形県神社庁正式参拝

三月

・四　日　海上挺進隊の碑慰霊祭奉仕
・八　日　北海道沖縄会正式参拝
・一二日　前田高地平和の碑慰霊祭奉仕
・一二日　三重県神社庁正式参拝
・二一日　春分祭
・二四日　靖国神社三井権宮司正式参拝

四月

・二二日　宵宮祭、霊璽簿奉安祭
・二三日　第四十八回春季例大祭斎行
・二九日　昭和祭
・二九日　国立沖縄戦没者墓苑慰霊祭奉仕

五月

・八　日　山梨県神道青年会正式参拝
・一五日　沖縄本土復帰記念祭
・三〇日　滋賀県遺族会正式参拝

六月

・八　日　天皇皇后両陛下御渡航行幸啓安泰祈願祭
・一三日　いわお戦友会慰霊祭奉仕
・一七日　しづたまの碑慰霊祭奉仕
・二二日　勇魂の碑慰霊祭奉仕
・二二日　埼玉県遺族連合会正式参拝
・二三日　沖縄戦戦没者総合慰霊祭
・二七日　神宮研修所正式参拝
・三〇日　大祓式

八月

・一五日　終戦記念日（みたま祭り）
・一七日　八重瀬・高知児童生徒交歓会正式参拝
・一七日　群馬県遺族会児童生徒正式参拝

（毎月一日に月首祭、二十三日に月次第を斎行）

御奉納いただきました

〈敬称略〉

寄贈図書

（平成十七年九月～平成十八年八月）

・「朝陽　平成十六年」旧拓務省第五次満州朝陽屯開拓生存者の会編（同会より）
・「朝陽　戦後六十年」旧拓務省第五次満州朝陽屯開拓生存者の会編（同会より）
・「国を護るということ」三好　誠著（著者より）
・「聖徳太子と我が国の憲法を考えよう」三好　誠著（著者より）
・「北谷町の地名」　北谷町教育委員会編（東恩納みさき様より）
・「日英対照神社関係用語集」　神道文化研究会編（同会より）
・「偲び草　戦車第二師團史外」川村　温夫著（著者、並びに東門弘様より）

御奉納品物

・正面幕　㈱ジーマ、ジーマックス　様
・正月参拝者用御神酒二樽　㈱ジーマ、ジーマックス　様
・樽酒　龍華会　様
・泡盛　㈱久米島の久米仙　様
・乾物　佐藤　武四郎　様
・日本酒　纐纈　信義　様
・日本酒　福岡　英男　様
・お茶　西澤　功子　様
・酒　宿谷　長次　様
・ジュース・酒　下山　和子　様
・メロン　大山　トメ　様
・お茶　小坂　シゲ　様

玉串料御奉納者名（社務日誌掲載以外）

・沖縄県豊見城市　伊藤　陽夫　様
・明治神宮権禰宜　吉田　一博　様
・皇學館大學文学部　白山芳太郎教授外ゼミ学生
・三重県神道青年会　午菴　正臣　様
・大阪府　小野辺　美智子様　張　月華　様
・神奈川県横浜市　多田　容幸　様
・兵庫県宝塚市
・三重県四日市市　森　安吉　様
・学校法人桜岡学園名誉理事長　櫻岡　勝蔵　様
・北海道連合遺族会副会長　橋谷　勉　様
・佐賀県杵島郡　北野　オクニ　様
・福井県今立郡　岡本　岐美子　様
・福井県小浜市　富永　順二　様
・岐阜県岐阜市　岡田　きよ子　様
・和歌山県有田郡　西本　とよ子　様
・神奈川県座間市　鴨下　稔　様
・兵庫県西宮市　今西　右子様
・沖縄県那覇市　照喜名　良明　様
・京都府宇治市　上田　明子　様
・石川県神道青年会会長　葛原　秀史　様
・白山比咩神社権宮司　北村　伸一郎　様
・久士十一期海上挺進隊隊　矢野　直彦　様
・北海道美唄市　林　紘司　様
・福岡県中小企業経営者協会　会長　小早川　明徳　様
・秋田県唐松山神社　物部　長秀　様
・沖縄県豊見城市　医療法人　空と海のクリニック　様
・愛媛県松山市　小野　常子　様
・愛知県大府市　深谷　幸平　様
・東京都多摩市　諸星　千代子　様
・滋賀県栗東郡　堀池　四郎　様
・屋良友の会本部　会長　石黒　光信　様
・福岡県北九州市　茶屋本　廣喜様御夫妻
・東京都世田谷区　岩井　富子　様
・埼玉県桶川市　臼田　智子　様
・千葉県東金市　高山　智司　様
・京都府船井郡　堀　武士　様
・東京都多摩市　諸星　千代子　様他
・京都府向日市　斉田　真　様
・沖縄県那覇市　宮里　隆司　様
・東京都渋谷区　水谷　敦憲　様
・神奈川県横浜市　原田　房子　様
・東京都新宿区　伊藤　さだ子　様

御奉納ありがとうございました。

崎山章子命

沖縄県出身
県立女子師範学校・厚生省立栄養学校
第三十二軍参謀部
昭和二十年六月二十二日没・二十三歳
陸軍軍属

崎山軍属は、沖縄の小学校、県衛生課に勤務の後、昭和十九年八月、陸軍第三十二軍軍医部、次いで翌二十年二月に特に選ばれて同参謀部に転じ、司令官牛島満中将、参謀長長勇中将等の指令部付きとなった。

同年四月一日、米軍が沖縄本島に上陸し、死闘二カ月半余が経過し、三十二軍の終焉が迫った六月十八日、両将軍に自ら縫い上げた下着を差し出した。

牛島司令官は、「有難う。貴方の縫われた新しい下着を着けて…」と一旦言葉を切り、「決して死んではならない。昼間、竿の先に白布をつけて脱出すれば米兵は撃たない」と言葉を続け、翡翠のカフスボタンを贈った。

長参謀長も愛用の抹茶茶碗を贈り、司令官と同様に自決を戒めた。

しかし、翌十九日軍医部の壕が火炎放射機の攻撃をうけて多くが戦死し、生き残った崎山軍属ら三名は手榴弾で自決した。

この報をうけた両将軍は、静かに合掌黙禱し、運命の六月二十三日に、贈られた真新しい下着を着けて自刀された。長参謀長の下着には「忠即盡命」の墨書がしてあった。

【英霊にこたえる会発行　平成十八年版　靖國カレンダー　五・六月より転載】

編集後記

・沖縄県護国神社社報「うむい」第七号をお届け致します。

・秋篠宮家に於かれましては、悠仁親王殿下が御生誕になられ、当神社でも御奉祝の御記帳所を拝殿前に設置し、多くの参拝者から御記帳いただきました。

・また、八月十五日には公約通り、小泉前首相の靖國神社参拝が行われ、当神社にも多くの方々から賞賛の声が寄せられました。

・しかし乍、沖縄という土地柄、これらの事柄に対し、必ずしも賛同の声だけではなく、反対の声も聞こえてきます。

・ここで、御記帳戴きました皆様方並びに御賛同賜りました皆様方に御礼申し上げますとともに、改めて国民が一丸となって皇室問題並びに靖國問題に取り組む必要性を感じた次第でございます。

発　行　平成十八年十月一日
発行所　沖縄県護国神社
〒九〇〇―〇〇二六
沖縄県那覇市奥武山町四四番地
TEL〇九八―八五七―二七九八
FAX〇九八―八五七―七九一七
編集担当　加治　順人
印刷所　㈱うるま印刷